四方簿著

『焼畑の潜在力――アフリカ熱帯雨林の農業生態誌――』

昭和堂　2013年　xi＋212ページ

高根（たかね）　務（つとむ）

Ⅰ

19世紀後半から西アフリカで急速に生産地域が拡大したカカオ生産は，そのほとんどがアフリカ人の小規模生産者によっておこなわれ，現代でもこの構造は変わっていない。カカオ生産が大規模プランテーションではなく小農経営によっておこなわれてきた背景には，カカオ生産が在来の主食作物生産システムと共存してきた事実がある。農民は未開墾地を切り開くとまず，主食となるプランテンバナナ（料理用バナナ）やイモ類などを植え付ける。これら主食作物がある程度生長した段階で，今度はカカオの苗木を主食作物の葉が生い茂った日陰に植え付ける。これは，カカオの幼木が直射日光に弱く，生長した主食作物がカカオの苗木に適当な庇陰環境を提供するからである。そして数年のうちに主食作物の収穫が終わると，畑には生長したカカオ樹だけが残され，その後はカカオの収穫が本格化する。このように，従来は主食作物生産とカカオ生産は同じ営農システムのもとでおこなわれてきた。しかし近年，人口増加と土地不足が顕著になってきた地域においては，カカオ畑と主食作物畑の分離・固定化が進んでいる。

本書は，上記のような土地不足がまだ顕著ではない，カメルーン東部の熱帯雨林における焼畑とカカオ生産の関係を論じたものである。熱帯農業生態学を専門とする著者は，2000年から2006年にかけて延べ27カ月も調査対象地域に滞在し，そこに住むバンガンドゥの人々の焼畑の営みを詳細に調査した。本書の大きな特徴は，このフィールドワークで得られたデータをもとに議論が構築されていることである。巻末に20ページにわたって掲載されている植物の品種リストに如実に示されているとおり，本書における著者の議論は単なる印象論ではなく，綿密な証拠にもとづいて展開されている。

本書の構成は以下のとおりである。

はじめに
第１章　序論――焼畑か？アグロフォレストリーか？――
第２章　バンガンドゥの生業――農耕を軸とする多面的資源利用――
第３章　森にもどる畑――焼畑におけるバナナ生産――
第４章　バナナとカカオのおいしい関係――自給作物と商品作物の共存の基盤――
第５章　カカオ畑の樹木――「森にもどる畑」における生物多様性――
第６章　結論――焼畑の潜在力――

Ⅱ

第１章では，研究の目的と視座が提示されている。著者はアフリカ熱帯雨林における焼畑とアグロフォレストリーに関する先行研究を整理したうえで，本書の基本的なアプローチとして次の２点を強調する。第１は，調査対象地域のカカオ生産を，主食作物生産の場としての焼畑の枠組みの中で理解することである。つまり，現金獲得を目的とした商品作物であるカカオの生産を，バナナなどの主食作物生産と対立・競合するものとしてとらえるのではなく，両者の共存関係に注目するアプローチを著者は採用する。第２は，焼畑を長い時間軸のなかでダイナミックに変化する，動的なものとしてとらえることである。そのような変化は，森林の生態景観の中に見いだされることもあれば，グローバルな市場経済の動きに呼応した村の生計の中に見いだされることもある。このように調査地域の焼畑を総体的かつ動的にとらえることにより，焼畑にかかわる人々と熱帯雨林の双方がもつ潜在力（著者のいうところの「焼畑の潜在力」）が明らかになる，と著者は主張している。

第２章では，調査対象であるバンガンドゥの人々の生業の全体像が明らかにされる。バンガンドゥは，主食作物生産のための焼畑と現金収入のための

カカオ生産を中心とした農耕を基盤とし，それに狩猟採集や漁撈を組み合わせて生計を維持している。ここで著者が強調するのは，主食作物畑とカカオ畑の両方に通底する基本的なサイクルである。主食作物生産がおこなわれる焼畑は，作物の収穫が終わった後には休閑に付され，一定期間が経過した後に再び伐開され焼畑として再利用される。カカオ畑の場合も同じように，伐開後に主食作物であるバナナやトウモロコシが植えられ，これら主食作物が商品作物のカカオとともに混植されて同一の畑内に共存している。そのような畑では，最初にトウモロコシが，次にバナナが収穫され，その間にカカオ樹も生長する。畑の伐開から数年が経過し主食作物の収穫がほぼ終わると収穫物はカカオが中心となるが，このカカオ畑の相当数は放置されて二次林化し，カカオ価格が高くなると放置されていたカカオが再利用される。このように主食作物畑とカカオ畑は，いずれも伐開・作物生産・休閑（放置）・再伐開（再利用），という同じ土地利用パターンを軸に成り立っていると著者は指摘する。

第3章では，バンガンドゥの主食として重要なバナナの生産について検討されている。ここで明らかにされているのは，バナナの通年収穫を可能にする技術と，「畑」と「森」の連続性である。バンガンドゥの人々が主食のバナナを一年中収穫できるのは，⑴生育速度の異なる多くの品種を栽培する方法，⑵バナナの植え付け時期をずらすことで収穫期を拡散する方法，⑶造成時期の異なる複数の焼畑を同時的に管理する方法，などを組み合わせているからである。また彼らの認識の中では，「畑」と「森」は決して明確に区別された二項対立的なものではない。造成された焼畑は，栽培品種の種類や耕作の集中度に応じて時間とともに姿を変え，最終的には二次林になる。しかし畑と二次林の境界は曖昧で，放棄され休閑期に入ったようにみえる藪でも農作物の収穫が得られており，長い時間軸の中で「畑」と「森」は連続している。この連続性がバンガンドゥの焼畑の特色であり，これをある一時点でみると，「畑」から「森」に移行している（二次林化している）場所と，「森」から「畑」に移行している（新規の畑を造成している）場所を，人々は同時的に管理していることになる。このように，「畑」と「森」の連続性と，状況の異なる焼畑の同時管理ゆえに，バナナの通年収穫と食糧供給の安定性が可能になっていると著者は説明する。

第4章では，主食作物生産の場である焼畑とカカオ畑それぞれの特徴が比較検討されている。まず両者の相違点としては，①新規に畑を造成する際，カカオ畑の場合は原生林を，焼畑の場合は二次林を伐開する，②苗木の生長のために日陰が必要なカカオ畑では，造成の際に伐採されずに残る樹木の割合が高い，などがあげられている。しかし著者は，このような相違点があるものの，カカオ畑は基本的に主食作物生産のための焼畑と同じサイクルで管理されていると主張する。つまり，カカオ畑の造成は最終的にカカオの常畑に行き着く（つまり主食作物畑と異なるサイクルをもつ）のではなく，主食作物生産のための焼畑のサイクルの中で休閑期に二次林として優勢になる樹種が，カカオに入れ替わったものであると著者は解釈する。つまりバンガンドゥのカカオ畑管理サイクルにみられる，⒜原生林の伐開，⒝主食作物とカカオ苗木の混栽，⒞カカオと他の樹種の混合，という変化のうち，最後の⒞の部分はカカオの常畑化ではなく，通常の焼畑のサイクルにおける主食作物畑が「森にもどる」（117ページ）過程である。したがってカカオ畑の相当数が管理されずに放置されているのは，常畑の管理を怠っている状態と見なされるべきではなく，「森にもどる」過程にある焼畑（主食作物畑）から必要に応じて資源（カカオ）を利用している状態ととらえるべきであると著者は論じている。

第5章では，カカオ畑の生物多様性について論じられている。バンガンドゥのカカオ畑にはさまざまな樹木が残されており，生物多様性の度合いが高い。バンガンドゥは，伐開の際に残す樹種一つひとつの有用性にはさほど頓着せず，カカオ畑に必要な適度の庇陰や風通しを確保するという基準で畑内に残す樹種を決めている。このような樹種の有用性を重視しない選択方法が，結果として畑内に残される樹種の数を豊富にし，カカオ畑における生物多様性の度合いを高めている。バンガンドゥの畑にみられる多様性は，通常のアグロフォレストリーのように樹木の有用性を考慮して人々が意図的に樹種を残す，という「管理された多様性」ではない。有用樹種のみを選択的に残すことは，逆に畑内の生物多様性を減少させることになりかねないと著者は述べて

いる。

第6章では，本書の結論がまとめられている。本書における著者の主張の中核は，バンガンドゥが「自給用の食糧をまかなうために，焼畑やカカオ畑を新しくつくり続けており，同程度の畑が，森にもどっている」（162ページ）ということである。つまり，バンガンドゥのカカオ畑は，商品作物の常畑ではなく，「焼畑の現代的な展開」（162ページ）としてとらえるべきであり，主食作物生産の場としての焼畑の文脈で理解するべきだと主張されている。さらにバンガンドゥの焼畑は，「畑を畑として維持することを前提としない」（158ページ）ものであり，森林を循環的に利用し，農作物を植生遷移のプロセスに組み込んでいることが大きな特徴である。このような「森にもどる畑」としての焼畑が，さまざま形で人々の生活を維持し，同時に生態系のダイナミックスをも維持している。これが著者のいう，森と人との相互関係としての「焼畑の潜在力」が十全に発揮されている状況である。

Ⅲ

本書の最大の貢献は，カメルーン南東部におけるカカオ生産を，商品作物生産の拡大という通常の視点からではなく，主食作物生産を中心に据えた焼畑の文脈でとらえ直した点である。伐開によって新規造成した畑地に主食作物とカカオの苗木を混植し，バナナなどの主食作物の収穫とカカオ樹の生長が同時並行的に進行するという生産システムは，カメルーン南東部のみならず他の西アフリカ地域にもみられる。通常この生産システムは時間とともにカカオの常畑化に向かって進行し，カカオからの所得は農民の生計の中心を担うようになる。しかしバンガンドゥの人々にとってのカカオは，その価格変動の大きさなどから生計の基盤となりえない。バンガンドゥにとっての生計の基盤はあくまで焼畑から得られる主食作物であり，カカオは主食作物生産のための焼畑が「森にもどる」サイクルの中で得られる副産物のひとつにすぎない。現金所得をもたらす輸出作物であるがゆえに研究者の注目を集めてきた西アフリカのカカオ生産を，バンガンドゥの人々の視点から相対化して，それを主食作物畑としての焼畑とその後の森の再生という長い時間軸からとらえ直した著者の視点は新鮮で，注目に値する。

通常のアグロフォレストリーの文脈とは異なる解釈をいくつか提示している点も，本書の重要な貢献である。たとえば商品作物のカカオと主食作物の組み合わせは，アグロフォレストリーでは異なる樹種や作物を組み合わせた「常畑」の文脈でその効用が論じられる。しかし著者はカカオを，主食作物生産を目的とした焼畑のサイクルに出現する休閑期の二次林のいわば亜種としてとらえ，常畑に固定され管理された商品作物ではなく，森林再生のダイナミズムの一部としてカカオを位置づける。あるいは有用性の異なる複数の作物を意図的に組み合わせるアグロフォレストリーについては，むしろ品種の有用性をそれほど重視しないバンガンドゥの焼畑の方が結果的に生物多様性を保持している，という逆説的な事実を実証的に提示する。これらはいずれも，アグロフォレストリーに関して一般的に理解されている事柄についての再考を迫るものである。

本書各章の間には，著者のフィールドワークの一コマを描写した2ページほどのエッセイが「バナナ日記」と題して挿入されている。評者は当初このエッセイを，専門的な本書の内容で疲れた読者を癒すための読者サービスと思っていた。しかしよく読んでみるとこれらのエッセイは，バンガンドゥと焼畑の関係をより広い視野から理解するための情報を巧みに供給していることに気づく。その内容は，民族によって異なる調理道具，食糧の通年収穫を重視する人々の論理，男子の通過儀礼，狩猟採集民バカとの関係などである。焼畑と森林に関する生態学的分析という本書の中心議論からは外れるが，読者がバンガンドゥの人々の生活を多面的に理解することを助ける，著者の心憎い配慮がこれらのエッセイから見て取れる。

最後に，著者への要望を1点あげておく。著者は，森林の伐開，焼畑の造成，そして再び森林の回復というプロセスを通じ，森と人の相互関係としての焼畑が最大限に発揮され，人々の生活が支えられていると結論づけており，その背景には「森の旺盛な回復力」（163ページ）があると指摘する。ここで喚起される疑問は，この「森の旺盛な回復力」はいつまで持続できるのか，またそれが持続できなくなったときに「焼畑の潜在力」はどう変化するのか，ということである。たとえば1940～50年代の

ガーナ西部では，道路インフラも未整備で未開墾の森林が豊富に存在し，当時のガーナの農民は今日のバンガンドゥと同じような方法で主食作物とカカオを生産していた。しかしその後の道路網の拡充と人口増加にともない，焼畑の造成と森林の回復というサイクルを基盤としないカカオ畑の常畑化が進行した。将来カメルーン東南部でも道路網の整備や人口増加が進み，土地への人口圧力が森林の自然回復を妨げるような事態が起こったときに，現在の「焼畑の潜在力」はその力を維持できるのか。著者にはぜひ，本書のベースとなったフィールドワークから20年が経過した時（2020年代）にバンガンドゥを再調査してもらい，この点を明らかにしてほしい。

（東京農業大学国際食料情報学部教授）